

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 1 日現在

機関番号：16401
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010 ～ 2012
 課題番号：22520249
 研究課題名（和文）アメリカ文学と自然・環境保護運動

研究課題名（英文） Environmental Movement in American Literature

研究代表者 上岡 克己
 (KAMIOKA KATSUMI)
 高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
 研究者番号：10135973

研究成果の概要（和文）：作家と自然保護活動家とは必ずしも両立せず、むしろ作家たちは自然保護の理念を高く掲げ、自然保護運動家たちの精神的な拠り所となった。作家（ネイチャーライター）の著書がインスピレーションを与え、自然保護を促し、それに応じて自然保護運動家が集まって自然保護団体を作り、世論をリードしていった、多くのウィルダネスを救う、すなわちアメリカの大地を守ったという構図が見えてくる。

研究成果の概要（英文）：My project “Environmental Movement in American Literature” was devoted to Rachel Carson in 2010 and 2011, and Henry David Thoreau in 2012. Especially I studied the development of Carson’s environmental ethics and Thoreau’s conservational ideas. The chief weapon of the nature writers and environmental writers who have protected the American lands has been the pen. Their books have inspired conservationists and environmentalists, who later have led the American environmental movement.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：米文学、自然保護運動、環境保護運動、レイチェル・カーソン、ヘンリ・デイヴィッド・ソロー

1. 研究開始当初の背景

①この分野の研究は当時も現在もほとんど見られない。拙著『アメリカの国立公園』

（築地書館、2002）において「ジョン・ミューアと国立公園」について触れ、アメリカの自然保護思想の最初の果実として国立公園

を評価した。次にソローの自然保護思想については、第7回京都アメリカ研究夏期セミナー報告書として““Huckleberries” as a Manifesto of Environmentalism” (2003) として公表し、自然保護思想の形成に関して、ソローの先駆性をいち早く指摘した。さらに「大地を読む」(上岡・高橋編著『ウォルデン』ミネルヴァ書房、2005) において、ソローの環境史家(environmental historian)としての役割を高く評価した。また「レイチェル・カーソンと緑の文学」(上岡・上遠・原共編著『レイチェル・カーソン』ミネルヴァ書房、2007) の中で、カーソンと環境保護運動について考察した。

②本研究では、人間と自然をめぐる文学研究(ネイチャーライティング研究)を第一義としながらも、文学研究の対象を狭く限定したり、固定化することなく、自由自在にジャンルや境界線を侵犯し、越境してエコロジー、環境思想、国立公園や自然保護区、ウィルダネス、ジェンダー、人種、環境教育の領域をも考察する。アメリカ文学と自然保護運動・環境保護運動・環境正義運動との関係を探る本研究は、従来深く論及されてこなかった、いわば未知の知の領域である。斬新かつ魅力に満ちた分野で、地球環境問題が深刻化する中で、文学が社会や地域に発信できる数少ない領域の一つである。文学研究の可能性と活性化が期待される価値ある研究となろう。

2. 研究の目的

アメリカのネイチャーライティングや環境文学研究の中で、比較的手薄であった研究分野に「文学と自然・環境保護運動」がある。エコロジーや環境思想の研究成果を受けて、文学作品の中に自然保護の思想を見出そうとする研究がやっと始まった。文学における自然保護の思想がどのように形成され、後の

自然保護運動や環境保護運動、環境正義運動とどのようにかかわってきたかを、ヘンリー・デイヴィッド・ソローとレイチェル・カーソンを中心にジョン・ミューア、アルド・レオポルド、および現在のテリー・テンペスト・ウィリアムス、サンドラ・スタイングレイバーまで辿り、彼らの自然保護、環境保護、環境正義に対するメッセージを考察する。

アメリカは世界最大の二酸化炭素排出国であると同時に、自然保護・環境保護思想を世界に広めた国でもある。この逆説的な国において、文明発展と自然・環境保護の狭間で闘った勇気ある作家たちに焦点をあて、問題点を勅旨して何らかの解決策を提示したいと思う。

3. 研究の方法

3年間という限られた研究期間内では予定していたすべての作家・作品を取り上げる余裕がなく、結局ヘンリー・デイヴィッド・ソローとレイチェル・カーソンに限定せざるを得なかった。最初の2年間はカーソンと自然・環境保護運動との関係を緻密に分析することができ、それが2編の論文につながった。最終年度はソローの『メインの森』における自然保護の理念の提唱を扱った。これは『ソローとアメリカ精神』という共著に結実した。

4. 研究成果

①研究課題「アメリカ文学と自然・環境保護運動」の中で、22年度はレイチェル・カーソンと自然保護運動との関係を、主に初期の彼女の作品をとおして考察した。23年度においては、同じくレイチェル・カーソンを取り上げ、彼女の中期・後期の作品を取り上げ、彼女の自然観や環境思想の成長の跡を克明に辿った。特に日本ではまだほとんど言及されていない講演原稿にまで研究を進め、彼女

の環境思想の先駆性を指摘することができた。彼女の原子力に対する懸念も、昨年の福島原発事故との関連で言及した。彼女が原子力時代に生きていたことを再認識するとともに、彼女が愛する海の環境汚染への警告は現代にも通じるところがある。

この研究の結果、カーソンと自然保護や環境保護との関係が明らかになった。彼女の自然観や環境思想という概念はいくつかの段階を経ながら徐々に熟成されていったと捉えることができる。もちろん彼女は自然保護運動を引っ張って行く活動家ではなかったが、その持ち前の先見的な洞察に富む環境思想は、読者の心をつかんではずすことはない。彼女が天分としてもっていた自然科学者と詩人の二つの要素が融合して、新しい価値観や自然観・環境思想を作り上げたと言っても過言ではない。それはエコロジー思想を基盤とした、ネイチャーライティングの伝統を継承したもので、最終的には彼女の慕うシュバイツァーの「生命への畏敬の念」という哲学にたどり着く。

研究課題「アメリカ文学と自然・環境保護運動」の中で、最初の2年間はレイチェル・カーソンを中心に考察してきたが、最終年度はこの分野の先駆者とみなされるヘンリー・デイヴィッド・ソローを取り上げた。ソローの著作に見られる自然保護的な言説に関してはすでに多くの論文で言及してきたが、今年度は『メインの森』におけるソローの自然保護意識の誕生から成熟までの変遷を綿密に辿り、拙論「ソローとウィルダネス——『メインの森』再考」として、ヘンリー・ソロー没後150周年記念論集『ソローとアメリカ精神——米文学の源流を求めて』（金星堂、2012）に掲載した。本書は科学研究費補助金、研究成果公開促進費学術図書（課題番号 245042）として出版され、高い評価を得

ている。

②最終年度にあたり、科研報告書の序として研究題目「アメリカ文学と自然・環境保護運動——概説」を執筆した。取り上げるべき作家・作品はあまりにも多く、3年間という研究期間ではすべてを論じることはできなかった。その代わりに序論として、アメリカ文学と自然・環境保護運動との関わりに付いて、概略的な考察を加え、全体として研究目的の明確化をはかった。以下にその結論部分を引用する。

以上をまとめると、狭い地域でのローカルな自然保護策は植民地開拓とともに誕生したが、広大なウィルダネス（原生自然）の生態系全体を保護する自然保護は、1830年代から50年代にかけてキャトリンやソローの自然保護区提唱に始まり、19世紀末から20世紀初頭にかけて、政治家ルーズベルトによる大規模な自然保護区の設立、ミューアと同時期に誕生した自然保護団体の活躍により、国立公園設立運動へと発展していった。しかし1913年のヨセミテ国立公園内にあるヘッチ・ヘッチー溪谷におけるダム建設の認可が、アメリカ自然保護史上大きな転機となった。これを契機に自然保護派と開発派の対立が激化し、20世紀後半まで数少ないウィルダネスをめぐる激しい闘いが繰り返されることとなった。

しかしながら歴史を振り返ってみると、どの闘いにおいてもどちらか一方が勝利を得たとしても、完全な勝利はありえず、敗れたとはいえ別の機会には勝利を収めるなど、むしろ両派の妥協の上に自然保護は進んだ（開発も進んだ）というのが正確かもしれない。20世紀後半自然保護派にとって拠り所となったいくつかの法案、「原生自然法」、「絶滅危惧種法」などが制定され、1980年には「アラスカ国有地保全法」が通り、アラスカの1/3

が自然保護区の対象となったことなどは大きな成果と言えよう。

しかし一方でレイチェル・カーソンの『沈黙の春』を境に、環境の時代に突入すると、人間活動そのものが地球に大きな負荷を与えていることが判明し、もはやローカルな地域での自然保護や大規模なウィルダネスでさえ、その影響を避けることはできず、地球環境問題という人類が初めて体験する難問と対峙せざるをえなくなった。地球環境問題に自然保護区の境界も、ましてや国境もなく、人類はこのような状況のもとでいかに生き、いかに自然環境を守るべきか、自問を余儀なくさせられたのである。

そのアプローチには様々ある。テクノロジーの進歩ももちろん必要であろうが、私たち人間自身の心が変わらないと、問題解決には結びつかない。その一つに環境思想、あるいは環境倫理という領域がある。多くの環境文学作家たちは今まさにこのような思想や倫理を展開しているのであり、そのカバーする領域は、従来の白人男性エリート主義的自然保護から、多文化、フェミニズム等の概念を巻き込んだ環境正義運動へとシフトしている。松野によれば、「従来の富裕層やエリート層中心の自然保護（保存）運動から、環境問題における社会的正義、すなわち環境的正義の実現をめざして、一般大衆を中心とする社会改革志向型の環境運動へと移行」しているのである。さらに最近では地域、国家の自然環境保護運動から、惑星的思考で地球環境そのものを守る「地球憲章」なるものが制定され、持続可能で平和的な世界を築こうと多くの環境文学作家たちが取り組み始めているのである。

作家と自然保護活動家とは必ずしも両立せず、むしろ作家たちは自然保護の理念を高く掲げ、自然保護運動家たちの精神的な拠り

所となったのではないだろうか。作家（ネイチャーライター）の著書がインスピレーションを与え、自然保護を促し、それに応じて自然保護運動家が集まって自然保護団体を作り、世論をリードしていった、多くのウィルダネスを救う、すなわちアメリカの大地を守ったという構図が見えてくるのである。

③拙論2編、共著1編はこの分野の研究に一つの方向性を提示するものである。ただ研究目的の項でも触れたように、この分野の研究はまだ始まったばかりで、さらに多くの作家・作品における自然・環境保護運動との関係性の考察が究明される必要がある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①上岡克己「レイチェル・カーソンと環境保護運動」『国際社会文化研究』第12巻（2011）：27-44. 査読無

②上岡克己「レイチェル・カーソンと自然保護運動」『国際社会文化研究』11巻（2010）：33-49. 査読無

〔学会発表〕（計1件）

①上岡克己「『沈黙の春』出版50年」文学・環境学会、2012年9月1日、近畿大学（大阪府）

〔図書〕（計1件）

①佐藤光重、竹内美佳子、上岡克己、その他、22名中5番目、金星堂『ソローとアメリカ精神』（2012）：61-76.

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上岡 克己 (KAMIOKA KATSUMI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：10135973

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし